2016.1.31.

おーい図書館

No.181

発行 おーい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL. 047-311-0886

松戸市図書館整備計画審議会傍聴

報告 青木和子

①2015年10月19日(月)

《人口40万人都市の図書館における比較について…松戸市と同規模自治体(人口40〜50万人)全国27市の中央図書館の事例データ》

柳澤委員の報告

項目	27市の平均	松戸市
人口	47万6千人	48万6千人
延べ床面積	5千706㎡	1千932㎡
駅からの所要時間	徒歩10.5分	徒歩7分
蔵書冊数	62万2千冊	15万6千冊
開架冊数	29万5千冊	12万冊
一人当たり年間貸出冊数	5.4冊	4.7冊

全国27市すべてのデータが映像と共に示されました。

続いて意見交換。

○松戸に必要なものは、第一に蔵書冊数。

○一人当たりの貸出冊数が多い町では、地区館がしっかりしている。駐車場も広い。

○開架率(蔵書における開架の割合)が高くても、蔵書の絶対数が大切。30万冊は必要。30万冊を超えると貸出は飛躍的に増える。数字は裏切らない。

○図書館はファミレスのように入り易く利用し易い所であるべき。そこに、リタイアした図書館の専門職員がボランティアとして居ると良い。

○図書館員がコーディネーターになって交流ができる、英米の図書館のようであってほしい。

○いつまでも居たくなるような、幼児から年配者までが集えて、他市からも来たくなるような図書館を目指したい。

②11月9日(月)

《提言について…中央図書館整備に係る機能に関する考慮事項》

○情報提供および支援機能

一般開架スペース、雑誌新聞閲覧スペース、レファレンスカウンター、参考・調査室、郷土コーナー、対面朗読室、視聴覚試聴ブース、インターネット閲覧席、児童開架スペース、YAコーナー、児童レファレンスカウンター、読み聞かせコーナーなど。

○管理運営機能

管理事務室、資料整備作業室

選書室、電算室、配送仕分作業室、移動図書館書庫、学校連携室、スタッフ室、ロッカーなど。

○収集保存機能
開架書庫、閉架書庫、貴重書庫など。

○生涯学習支援機能
グループ学習室、研究個室、ラーニングコモンズ、プレゼンテーションスペース、展示室、視聴覚ホールなど。

○市民活動支援機能
ボランティア活動室、メディアラボ など。

○他機関連携機能

意見交換

○「…室」は閉じた空間。「スペース」「コーナー」としたい。塩尻図書館では閉じた部屋ではないので、活動するお互いの姿が見え、年令を越えた多様な市民の経験・知識・情報の交流がある。そこには、活動・情報・自己実現の空間が共に有る。

○どんなに素晴らしい大きな図書館があっても、地域館・分館が無い町は利用率が低い。

○松戸市に9分館があることの意味は大きいが、どこも同じで特徴が無い。地域性を生かすべき。トラックやバイク便を使って本の入れ替えをしたい。

○県立図書館や国会図書館の情報を、中央館を通して分館からでもレファレンスサービスを受けられるようにしたい。例え些細な事でも、分館においても利用者に「図書館に訊いてみる気」にさせることが大切。いつもカウンター前に人が居る状態であってほしい。そうすれば、図書館員も仕事が面白くなるはず。

○公共建築を造るにあたって、人口問題は非常に重要。20年後30年後の松戸市の姿から逆算して建設しなければならない。

○松戸市として30年後の市民に託せるか？使い方を変えていける施設にするには、備品や材質も大事。

○図書館は「成長する有機体」であり、予想がつかない事もある。

○図書館に「人」が居ること。「人」を育てることによって、投資に見合うサービスにつながる。

図書館はまちづくりの大切なテーマ！
公共施設再編の中で

報告 武笠紀子

松戸市は2014年3月「松戸市公共施設白書」を作成し、2015年8月には「松戸市公共施設整備基本方針」を策定。今後約3年間で公共施設再編計画の策定を目指しています。公共施設の老朽化が進み、人口

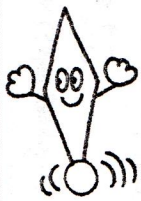
が減少していく中でそのあり方が問われている今、市民の意見を取入れようと「公共施設マネジメント・ワークショップ」が行われています。目的は「将来世代により良い資産を引き継ぐため」「より良いまちづくりに繋がる公共施設のあり方を前向きに考えるため」等です。

10月23日(金)に第一回が開かれ15名が参加。「おーい図書館」会員も5名参加。話し合いの中、図書館の話題で盛り上がりました。ファシリテーターの方も「図書館を視点とした『まちづくり』もあるかもしれない」とまとめていました。

11月9日(日)には「公共施設マネジメントシンポジウム01」が開かれ、「オガールに学ぶ」をテーマに人口3万3800人の岩手県紫波町に80万人も集まる、公民連携で造られた民間共用施設「オガール」について聞きました。紫波町経営支援部企画課公民連携室長の鎌田さんから「オガールプロジェクトについて」、㈱オガールプラザ&㈱オガールベース代表取締役の岡崎さんから「オガールプロジェクトの仕掛け方」を。大変興味深い話でしたが、松戸市がここから何を学ぶかが問題です。

①市長が替わっても崩れない公民連携 ②国の補助金に頼らないまちづくり ③地域でお金が回る仕組み ④地域に仕事と雇用を作ること などが重要だと思いました。

ちなみに「オガール」内につくられた紫波町図書館の維持管理費は「オガール」の使用料と固定資産税でまかなっているし、図書館は民間が「オガール」で実施する様々なイベントに協力しているそうです。



映画上映会
「疎開した40万冊の図書」

報告 青木和子

11月8日(日) 千葉市生涯学習センターで「としょかんふれんず千葉市」主催の上映会が開催されました。

当日のゲストは、元日比谷図書館職員の長谷みどりさんでした。彼女は退職の数年前、日比谷図書館90周年記念事業の準備中に、図書の疎開に関わる資料が入った箱と出会いました。そこには、本を運搬した都立一中(現都立日比谷高校)の生徒達の氏名や本を預かってくれた「蔵」との契約書なども有り、長谷さんはその資料達に呼ばれたと思ったそうです。

以前から図書館員から話は聞いていたが、民間で関わった人達の話を聞きたいと思い、当時の中学

生4人と蔵の持ち主（代替わりしていたが）から、当時は秘密とされていた話を聞くことが出来ました。

これを知った金高謙二監督は、ドキュメンタリーとして世の中に知らせたいと思い、長谷さんに連絡。2013年、映画が完成しました。

《あらすじ》

日比谷図書館は1908年（明治41年）東京市立日比谷図書館として開館。1943年、戦局の悪化に伴い、各地の図書館では蔵書の疎開が検討され始めた。日比谷図書館では中田邦造館長を中心に検討・疎開を決めたが、男子は戦地へ送られて人手が無い。そこで、都立一中生26名が動員された。史上空前の蔵書の疎開は過酷を極め、50km離れた奥多摩や埼玉県志木市にある民家の蔵へ、リュックや大八車で何度となく往復した。図書館の蔵書の他、神田の古書店の協力などもあり、民間の収集家の貴重本も買い上げて疎開させた。

1945年5月25日、連合国の大空襲により、日比谷図書館は残された約20万冊の蔵書と共に焼失した。しかし、疎開した約40万冊の図書は、奥多摩や志木市の蔵の中で戦火を免れた。

現代の図書館にまつわるエピソードとして、イラクで3万冊の本を戦争から守った図書館員、インターネットでの呼びかけに応えて全国から6万5000冊の絵本が福島県飯舘村に届けられたこと、東日本大震災で壊れた図書館に代わって移動図書館車が市民の心を支えた陸前高田市の例などが紹介された。

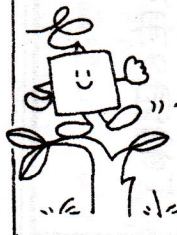
長谷さんは、秋岡吾郎氏（元日比谷図書館職員）の次のような言葉を紹介されました。

「戦火から文化や貴重な文献を守るためには、図書館員や市民の努力だけでは無理です。戦争を止める以外に無いのです。」

伊藤教育長と面談

報告　青木和子

11月6日(金)、教育委員会を訪ねて（「おーい図書館」会員3名）伊藤純一教育長と面談しました。

伊藤教育長は、公務で出張された際にも当地の図書館を視察するなど、図書館の重要性を深く認識しておられる方です。

松戸駅東口の公共施設整備計画や東松戸駅周辺の整備計画にも言及され、松戸市の図書館の未来にも希望が持てるお話を伺えたことが大変嬉しく、元気を頂くことが出来ました。